

縁きりじぞう

福岡市早良区、西油山のふもとにある野芥というところに、ちょっと変わったお地蔵さまがある。

ほんとうは於古能地蔵というのじゃが、人々は「縁切り地蔵」と呼んでおる。

どうして「縁切り地蔵」というのが、これからのお話じゃ。

「縁きりじぞう」

昔、1300年ほど前、糟屋の筑紫（つくし）長者の娘 於古能（おこの）は、それは美しいと評判じゃった。

「於古能さんをみたことがあるか。」

「いいや、まだ会うたことはなかばってん、ものすごく美しかげなぞ。」

「私は、ちらっと見たことがあるばってん、透き通るような色白で、あたりがぱあっと明るうなるごたあきれいか人やったよ。」

「それに気立ても良うて、やさしか娘らしか。」

人々は口々に於古能のうわさをしていたそう。

やがて、於古能の評判は重留に住む土生（はぶ）長者の耳にも届いて、土生長者は、於古能を嫁にもらうことにした。

さて、嫁入りの日のことじゃ。

於古能は七つの車に嫁入り道具をいっぱい積んで土生長者のもとへと向かっておった。

「うわあ、美しかねえ。」

「土生長者さんとはなかなかのお似合いたい。」

「それにしても、りっぱな嫁入りじゃなかか。」

「これでますます土生長者の家は栄えるばい。」

糟屋から重留まで長い道のりじゃ。行列が野芥というところに来た時、

「おーい、その行列を止める。」

於古能さん、もうあんたは嫁に行けんごとなつたばい。

婿さんになる土生長者が、たった今、病気で死んでしもうた。残念やばってん、あきらめて帰ってくれんね。

この知らせを聞いた於古能は、胸がはりさけんばかりじゃった。

土生長者のお嫁さんになって、幸せに暮らすはずじゃったのに、

於古能は悲しみのあまり、遺書を書いて自分の命を絶ってしもうた。

「うまくいったばい。」

「ばってん、於古能さんが自害するとは思わんやったな。」

「おお、おれはびっくりしたばい。」

「ま、於古能さんには気の毒なことをしたばってん、これで土生長者も辛い思いをするに違いなか。いい気味たい。」

土生長者が死んだというのは嘘だったのじゃ。

土生長者に恨みをもつ男たちが、土生長者を困らせてやろうと思うて、嘘をついたのじゃった。

知らせが嘘とも知らずに死んでしもうた於古能は、本当にかわいそうじゃなあ。

土生長者は、於古能のことをたいへんあわれに思うたそうな。

そして於古能の遺書を読むと、「これから先、誰も私と同じような悲しいめにあってほしくありません。

どうぞ、ここにお地蔵さまをまつてください。そうすれば、人々の結婚の悩みを取り去ってあげましょう」と書いてあったそうな。

早良区野芥には、於古能の遺言通りお地蔵さまがまつられておって、結婚の悩みをもつ人々がこのお地蔵さまの体をすこしづつ削っていくそうじゃ。

今では、辛いことや苦しいことなど、いろんな不幸と縁を切ってほしい人もたくさんお参りにくるそうな。

野芥の人々は、このお地蔵さまを大切に守っておるのじゃよ。